

## 藝術上實驗處世實驗譚

東京美術學校  
教授 黒田清輝君

藝術家が其逆境に處する方法を明細に叙説することは、一朝一夕の談話で容易に盡くすことは出来ないが、只自己の經驗上より之を述べて見やうと思ふ。

### 逆境の二方面

まづ、逆境に金錢上より來たるもの思想上より來たるものとの二種類がある、しかし、金錢上の逆境は固程度問題で、自分の逆境といふものは何も稼いで食はねばならぬといふ譯でないから、今日生活其物と苦闘してゐるものに比較すれば何の事もないのであつた、が、思想上より來たる頭腦の逆境は随分人並にはやつて來たと思ふ、而して此思想上の逆境は誰れにも有ることであらう、自分の耻曝らしてはあつた、明白に云ふと自分が歐洲に留學してゐる中思想の變化に一頓挫を來たした事がある。

### 職業の選擇

劈頭自分は畫家にならうか、なるまいかと言ふことが第一の苦境であつた、其は最初自分が留學の目的は他にあつたので、如何さま幼年時代には繪畫に對して尠からぬ興味を有つてみたのであるが、其趣味を有つてゐるから藝術家にならうと決心したのでなく、又、二三種の好きなもの、中から其一を選擇したといふ譯でもない、斯かる理由で幼少の時から別に藝術を職業とするといふ志望はなかつたのである、又自分が其れが好きであるから世に

處。し。や。う。と。い。ふ。覺。悟。を。も。持。つ。て。み。な。か。つ。た。の。で。あ。る。、。換。言。す。れ。ば。自。己。の。好。尚。と。い。ふ。事。と。職。業。と。い。ふ。こ。と。は。、。全。く。兩。様。に。解。釋。し。て。み。た。の。で。あ。る。、。ま。た。、。自。分。の。心。に。は。世。に。生。ま。れ。た。以。上。は。、。富。豪。と。な。つ。て。立。派。に。暮。さ。う。と。い。ふ。實。地。の。考。も。な。か。つ。た。、。只。何。か。歷。史。に。顯。は。れ。て。ゐ。る。や。う。な。一。事。業。を。し。て。見。た。い。と。い。ふ。考。で。あ。つ。た。、。ま。づ。、。ガ。ル。バ。ル。ヂ。ー。は。予。の。青。年。時。代。の。理。想。的。人。物。で。あ。つ。た。、。で。、。自。分。の。佛。國。に。留。學。し。た。の。は。全。く。政。治。學。研。究。の。目。的。で。あ。つ。た。。

當時我が國は未だ帝國議會の開らない時で、戰爭の眼前に横たはるといふ時機でもなかつたのである、同行の友人は陸軍なり海軍なりに志したのであつた、自分は幼少時代からの體質や性狀の上から言ふと、擊劍も好きで随分亂暴を働らいてゐたので、軍人に志願する筈であらうが、唯一意政治家となつて外交の遣り方、内治の方法等に心を盡くして偉らく遣つて見たいといふ志望であつた、で、三年許、法律の研究に従事したのである。

#### 思想衝突の歴史

其法律研究中に妙な事で、自分は繪畫の方面に志を變へたのである、事の起りは下らないことであつた、即ち自分が學校以外の法律家と或る法律上の問題に就いて議論を試みたことがあつた、自分には先方の説くところが、何うしても腑に落ちない、不條理で耐らない、科條を擧げて先方は論ずるが先方の考に依ると悪いものを助けるといふことに歸するのであるから、遂に大學の校長に質問して見ると、校長は自分の意見に同情を表して呉れたのであつた、此時を以て自分をつくぐと妙な感じを起したのである、しかし解釋は人によつて違うが自分の解釋は當時斯うであつた、即ち法律を學むで逐一個條を證議するといふことが政治家となるに如何程の要がある乎、

法律なるもの、精神は條理で善惡の判斷を下だして行ける、して見ると政治家となるには別に一々法律の個條を刻ぎむには及ばない、大體は常識の判斷で解決して往ける政治家は法律家を使ふて往くのであると、大層偉らく思ひ濟ましたのである

然うなると法律を研究するのが自分に取つては厭やになつた、嘗に法律研究が厭やになつたのみならず、轉じて政治家となるといふことも厭やになつたのである、斯くて自己の野心は一時に崩れて宛然夢の覺めたやうであつた、厭やに力味むであつた皮が剝がれて、野心は消え去つて唯飾のない本の木阿彌のみ残つたのである、それは實に自分に取つては思想の大變化であり、かつは、大苦境であつた。

其處で始めて、自分の本分は何であらうと自らを顧みるのであつた、政治家とならうといふ野心は失せて、世に立つには自分を立てるに過ぎぬといふ考を起したのである、換言すれば、從來の野心と皮を取り去れば、残るところは天然の物を見て愉快に感ずるとか、繪畫を見て喜ふといふことが、之が自分を組織せる分子で外には何も無い、即ち自己の向ふところをやれと決心したのである、折角遊學して親から優遇されてゐるのであるから、何か業を修めて自分を拵へねばならぬと思つて研究したのである。

#### 天性と處世

要するにこは自己經歷の一斑を表白するまでの事で、決して一般に強ゆるといふのではないが、自からを處する上に就いて、人は其假面を剝脱した所の眞の天性のまゝに着目するといふことが必要であると思ふ、さもなければ

ば、或る時機に到達して本に歸るであらうと思ふ。

天真と虚偽

其れから繪畫に志してから又悲境がある、之は一旦其性の向ふところに基いて決心して、政治家的の欲望は捨て、仕舞つたものゝ、悟つたやうで悟つてゐなかつたのは胸奥に潜む野心の囁きであつた、即ち形式には繪畫を修めつゝも依然として外界に對する慾望と内部の功名心とを打捨てることが出来なかつたのである、其は畫を書き始むると忽ち偉らしいものにならうと思つて、野心が勃々としてゐたのである、今日より當時の畫を見ると至つて拙いが、當時は非常によいものだと思つてゐたのである。

換言すれば繪畫に志して後も第二の政治家を繰り返へしてゐたのである、友人の作品を見れば其れが拙く見え、教師が満足の意を示して呉れるに伴れては、自分は得意になつてゐたが、さて二三年も修行してゐる中には、自分の技量が拙くなる氣かしたのである、何も拙くなる譯はなからうが、たゞ六ヶ敷なつたのである、さて、六ヶ敷なると他人の製作が拙く見えないうやうになり、且つは教師が自分の製作の缺點に注意を與たへて呉れたことも自分には如何なる理由なるか、分らないことあつた、然ういふ境遇を一年も一年半も<sup>マ</sup>げ<sup>マ</sup>ゐたので、遂には自分で自分を疑がつて來たのである、

自然界と野心

が、自分には疑の晴れる時機が來た、其は前に法律をやめた時と、同じ事を繰り返へしたので、馬鹿に偉らくな

らう、と思つたのが誤で、自分は天性で造るのであるから。上手にならうとか、巧妙なものを書くとかいふことは別問題である、藝術の爲めに盡くし、藝術の爲に身の處して往きさへすれば、自己生活の意義は遺憾なく發揮せられるのである、然うすればお隣を羨むにも及ばず、又、他人の評に心を配る要は無い、要はたゞ自分の好むところをやるといふことに歸するのである、教師のいふて呉れる缺點の分らないのは、自分の技量の足らないからである、然う決心したので苦悶は除却し去つたのである。

其れで期を定めて父も許して呉れて、愈々藝術研究に取りかゝつたのである。

#### 余の苦悶除却法

で、自分の當時の苦悶の原因を追究すると、全く野心が蟠まつてゐたからである、自分を知らるといふ度は尠なかつたのである、想ふに、藝術の修行者には其れ〴〵種々の苦悶があらう、しかし、其苦悶に處したら、能く那處に苦悶の原因があるか、と考かへて、之を解釋をして見ると、早く苦悶を去ることが出来て、修行を快くすることが出来るであらうと思ふ、藝術家として今日人に譽められるやうな考で製作するやうでは其心は苦いだらうと思ふ、さうなると、譽められないと、又非常に苦しくなつて仕舞ふのである、が、たゞ自分は自分の天性であるからやるといふ心地でやりさへすれば、巧妙に出来たのは氣の進むでゐた爲であり、拙いのは氣が添はないからと氣づくまでの事で、然う人言に介意する要はないのである、自分は今日の處、斯ういふ考でやつてゐる、そは自分の考を述べたまでの事である、他の事は吾人の知るところで無い。

しかし、人はさまざまで一樣に律し去る譯のものでない、繪畫を生活の爲めにやるものあれば、名譽の爲にやるものもある、其れで名譽の爲め或は生活の爲にやつても満足に往けることがある、能く書かうとして書けるものでもあらう自分はたゞ自己の感懷を述べたまでの事で、大抵は能く書かうと思つて成就したものが多いやうである。

### 藝術修養の根本義

しかし、茲に注意すべきは潤筆料の臭氣によつて製作したものと、自己の肺腑から出た製作とは、其間に至大な區別がある、彼の多年繪畫に従事してゐる畫家の製作と、畫家ならざる禪學家の感興に乗じて畫いたものと比較して見ると、線の配合着色等所謂畫法は如何にも専門畫家の方が巧妙に出来てゐるが、さて、其の神韻の纏繞たるところは却つて後者にあることが多いのである、其原因は蓋讀者の想像し得るところであらう、如何にも氣韻だけでは、美術の好尙家には満足は出来ないのであらうが、氣韻を忘却し去つたものには完全なる製作は出来ないのである、兎角完全の域に達するといふことに就きては、立派にやらうと言ふ考より、自分が其物に懂をがれて製作しなればならぬと思ふで、繪畫を修むるものは修業時代が濟むで頭と手と共に背かず往くやうになつて、始めて見るべきものが出来るに相違ないのである。

若き日の黒田が法律家を志望してパリへ留学したことはよく知られるところである。法律家から画家への転進については、「余の特性發揮徑路」（本書三九二〜三九六頁）、「私は豪傑主義の少年だった」（本書五五二〜五五四頁）でもふれられているが、まさに留学当時、転進の決意を養父清綱に伝えた明治一九年五月二日付の書簡（『黒田清輝日記』第一巻）と読みあわせてみると興味深い。書簡中「今般天性ノ好ム処ニ基キ断然画学修業ト決心仕候」と決意のほどを記した黒田だが、その後二十余年を経た右の文献でも「天性」あるいは「天然」といった語が散見される。さらにいえば美術上の理念を開陳した「美術教育の方針」（本書六五〜八二頁）でも「天然」の語が頻出し、「天」が黒田の思想に大きな位置を占めていたことがうかがわれる。